

A 研究報告概要

- 一覧表（感染症種類毎）
- 感染症毎の主要研究報告概要
- 研究報告写

研究報告のまとめ方について

1 平成22年9月1日以降に報告された感染症定期報告に含まれる研究報告（論文等）について、重複している分を除いた報告概要一覧表を作成した。

2 一覧表においては、前回の運営委員会において報告したものの以降の研究報告について、一覧表の後に当該感染症の主要研究報告の内容を添付した。

感染症定期報告の報告状況(2010/9/1 ~ 2010/11/30)

血対ID	受理日	番号	感染症(PT)	出典	概要	新出文献No.
100214	2010/9/29	100547	B型肝炎	J Infect Dis. 2010 Jul 15;202(2):192-201.	<p>広範なB型肝炎ワクチン接種後の、米国におけるHBV感染の状況について傾向について検討された。1999-2006年と1988-1994年の2期間、米国健康・栄養調査において6歳以上を対象に、HBc抗体、HBs抗原及びHBs抗体の検査が実施された。罹患率の概算は加重及び年齢調整された。その結果、1999-2006年間の、年齢調整後のHBc抗体(4.7%)とHBs抗原(0.27%)の罹患率は、1988-1994年(各5.4%及び0.38%)であり、統計学的に違いはなかった。2期間のHBc抗体の罹患率は、6-19歳(1.9%から0.6%)、及び20-49歳(5.9%から4.6%)では減少したが、50歳以上では(7.2%及び7.7%)変化がなかった。1999-2006年のHBc抗体の罹患率は、非ラテンアメリカ系白人(2.8%)やメキシコ系アメリカ人(2.9%)より、非ラテンアメリカ系黒人(12.2%)と他の人種(13.3%)で高く、また米国出生(3.5%)より外国出生(12.2%)の方が高かった。米国出生の6-19歳(0.5%)では、人種や民族性による違いがなかった。米国出生と外国出生の子供では1988-1994年(1.0%対12.8%)より、1999-2006年(0.5%対2.0%)の方が小さかった。また、6-19歳では、56.7%がワクチンによる獲得免疫を持っていた。米国の子供におけるHBV罹患率の減少から、世界的及び国内のワクチン接種の効果が反映されているが、一方で、成人におけるHBV罹患率の状況はほとんど変わらず、およそ73万人(95%信頼区間、55万-94万人)の米国在住者は慢性的に感染していると説明している。</p>	1
100214	2010/9/29	100547	B型肝炎	Pediatr Infect Dis J. 2010 May;29(5):465-7.	<p>慢性B型肝炎患児の唾液中のB型肝炎ウイルス(HBV)の水平感染が伝播手段となっている可能性を検討するために、慢性B型肝炎患児を対象に唾液中及び血漿中のHBV量の関連性が検討された。デンマークにおいて2006年5月から2008年11月間で、慢性B型肝炎患児(0~16歳)46人由来の唾液と血液中のHBV-DNAをTaqManPCR法にて定量した(検出感度は50 IU/mL)。その結果、本研究中にHBe抗原が陽性から陰性になった2人と、HBe抗原の状態が分からない11人を調査対象外とした25人(58%)がHBe抗原陽性で、18人(42%)がHBe抗原陰性であった。HBe抗原陽性の唾液中のHBV-DNA濃度は、HBe抗原陰性の血漿中のHBV-DNA濃度より高かった(39倍)。唾液がHBVの伝播手段になっていることが示唆された。</p>	2
100214	2010/9/29	100547	B型肝炎	Transfusion. 2010 Jan;50(1):65-74. Epub 2009 Aug 26.	<p>台湾において微量のB型肝炎ウイルス(HBV)DNAを検出目的とした個別検査とミニプール検査の有効性について報告された。台湾では、財政的な問題でルーチンの血液スクリーニングとしてNATの実施が制約されている。そこで、Ultrio分析(HBV、HCV、HIV)を用いて、実施可能な検査として個別供血検査(IDT)及び4本のミニプール(MP4)の実施成績を評価した。供血者10,290名(IDT 4210名、MP4 6080名)を対象に潜在的HBV陽性供血者(HBs抗原陰性/NAT陽性)を最高9ヵ月間、追跡調査した。Ultrio分析とHBs抗原検査結果が不一致の場合、さらにHBV抗体血清検査、代替NAT、HBV DNA定量検査ならびに塩基配列決定の解析を行った。その結果、再検査率は、IDT 0.55%とMP4 0.33%であった。HIVまたはHCV陽性症例は認められなかったが、潜在的HBV陽性例は12名(IDT 9名、MP4 3名)であった。そのうちの11名は、genotypeがB2であることが判明した。そのうちの10名は、追跡調査のために再来院し、ほとんどが潜在的HBV感染症(OBI)であると判明した。IDTの陽性率 9/4210(0.21%)はMP4の3/6080(0.05%)と比べ高いことから、台湾のようにOBIキャリアが多い地域においては、より高感度のNAT法で検査を実施することが有益であると説明している。</p>	3

血対ID	受理日	番号	感染症(PT)	出典	概要	新出文献No.
100214	2010/9/29	100547	B型肝炎	第46回日本肝臓学会総会; 2010 May 27-28; 山形	<p>小児B型肝炎ウイルス(HBV)キャリア患者の感染経路・感染要因を解析し、現在のHBV感染予防対策の問題点について検討された。</p> <p>施設1では32例、施設2では133例、施設3では22例の合計187例のHBVキャリアにおいて、男女比は1.43:1、診断時年齢は中央値2歳(0ヶ月～15歳)であった。1985年までに出生していた症例は102例で、母児感染59例(57.8%)、父子感染6例(5.9%)、輸血5例(4.9%)、水平感染31例(30.4%)、不明1例で母児感染が過半数を占めていた。一方、母児感染予防処置が導入された1986年以降に出生した症例は85例で、母児感染51例(60%)、父子感染13例(15.3%)、輸血2例(2.4%)、水平感染19例(22.4%)であった。母児感染の割合は1985年までに出生していた症例と変化なく、父子感染は増加した。母児感染のうち胎内感染が16例、予防処置実施中あるいは実施後にHBV感染が判明した症例が22例で、現在の予防法で防ぐことができなかった症例が合計38例(74.5%)であったが、予防処置の不完全施行や未施行によるものが8例(15.7%)存在した。父子感染や水平感染の症例でHBワクチンの投与症例はいなかった。HBV母児感染予防処置導入後も小児のHBVキャリアは発生している。母児感染のうち約15%は予防処置の不完全施行や未施行が原因であり、医療者の啓発を行うとともに、予防処置プロトコルを簡略な国際方式にすることにより完遂率が高まると思われる。また、父子感染・輸血を含めた水平感染例も4割を占めており、諸外国のように日本でも出生後早期にHBユニバーサルワクチンが導入されることが望まれる。胎内感染例については出生後の予防処置では防ぐことができず、HBVキャリア妊婦へのHBIGや抗ウイルス剤投与などを行うべきか、今後検討していく必要があると説明している。</p>	4
100214	2010/9/29	100547	B型肝炎	第58回日本輸血・細胞治療学会総会; 2010 May 28-30; 愛知	<p>2009年に全国の医療機関から報告された輸血関連感染症例(疑い例を含む)の解析結果と医療機関における「血液製剤等に係る遡及調査ガイドライン」(以下GL)に基づいた輸血前後の患者検体の検査実施状況等について報告された。2009年に医療機関より報告された症例を対象とし、献血者検体(献血者の保管検体等の個別NAT、当該製剤(使用済みバッグ)等の無菌試験等)と患者検体の調査により輸血との因果関係を評価した。また、医療機関における患者の輸血前後の検査の実施項目等を2007、2008年時と比較した。その結果、10月末現在の報告数は82例(HBV 37例、HCV 21例、細菌 20例、パルボB19 2例、HEV 1例、CMV 1例)であり、輸血との因果関係が高いと評価した症例は、HBV 5例、HEV 1例、及び細菌 1例であった。医療機関でのGLに基づく輸血前後の患者検体の検査実施数(輸血前:HBs抗原/HBs抗体/HBc抗体、輸血後:HBV-DNA)はHBV症例で2007年6例(8%)、2008年12例(20%)、2009年9例(24%)であった。またHCV症例では(輸血前:HCV-RNA or HCVコア抗原/HCV抗体、輸血後:HCV-RNA or HCVコア抗原)2007年12例(29%)、2008年5例(12%)、2009年5例(24%)であった。細菌症例での医療機関における患者血培の実施数は、2007年27例(90%)、2008年43例(94%)、2009年20例(100%)であった。また、医療機関からの使用済みバッグの提供が2007年17例(57%)、2008年35例(76%)、2009年17例(85%)であった。以上よりGLが医療機関に浸透していることが推察された。</p>	5

血対ID	受理日	番号	感染症(PT)	出典	概要	新出文献No.
100214	2010/9/29	100547	B型肝炎	第58回日本輸血・細胞治療学会総会; 2010 May 28-30; 愛知	スクリーニングNATのプール数の縮小効果について検討された。日本赤十字社では血液製剤等のHBV、HCV、HIVへの安全対策として1999年7月にプール検体(500本)によるスクリーニングNAT(AMP-NAT)を開始した。その後、プール検体数を50本、20本へと縮小し、2008年8月から検出感度向上を目的に新NATシステム(Taq-NAT)を導入した。2000年1月から2009年10月までの感染症報告症例のうち、輸血による感染を直接証明できた症例はHBV 91件、HCV 3件、HIV 1件であった。この原因となった輸血用血液の献血血液それぞれ 87献血、3献血、1献血を対象にし、当該献血時のスクリーニングNATをプール検体数別・試薬別に分類した。その結果HBV・HCV・HIV別に、50本プール前は8・0・0、50本プール/AMP-NAT(2000年2月-2004年7月:4.5年間)は46・2・1、20本プール/AMP-NAT(2004年8月-2008年7月:4年間)は30・1・0、20本プール/Taq-NAT(2008年8月-2009年10月:1.25年間)は3・0・0であった。ウイルス増殖スピードの遅いHBVについて、プール検体数の縮小・試薬の検出感度向上により、輸血感染HBVの減少傾向が認められた。一方、ウイルス増殖スピードの速いHCV、HIVはスクリーニングNAT導入後約10年が経過した中で輸血感染HCVが3件、輸血感染HIVが1件と、NATの導入自体に効果があったことが推測された。2008年8月から導入された新NATシステムにより、更なる安全性向上に努めているところである。	6
100214	2010/9/29	100547	A型肝炎	www.47news.jp /CN/201004	国立感染研究所により、A型肝炎の患者が平成22年3月以降に増加していることが報告された。A型肝炎ウイルスに汚染した水や食材の摂取によって感染する可能性を懸念して、魚介類の十分な加熱など、注意を呼びかけている。4月18日までの合計(速報値)は121人で昨年の報告数115人を超えている。11日までの5週間の81人について、年齢は20～88歳、2例が劇症化し、うち1例が死亡した。福岡県、広島県などが多く、報告医師が推定した原因食材は「カキ」が45%と最も多かった。	7
100209	2010/9/28	100530	E型肝炎	Journal of Medical Virology 2010;82(1):69-76	感染動態を調査するために、HEVに自然感染した2匹の国産妊娠ブタの各同産仔(A群及びB群)を生後6か月まで研究した。母子移行IgG及びIgA抗体はA群から検出されたが、B群からは検出されなかった。生後30-110日において、全群の糞便からHEVが検出され、17匹については、生後40-100日にウイルス血症が出現した。系統発生分析によって、全群にHEV遺伝子型3に非常に近い塩基配列であることが示された。特異的なIgG及びIgAの血清レベルは、IgAが糞便で検出されなかったが、全群で同様であった。ウイルス血症と抗体陽転の開始は、A群で有意に遅れていた。糞便に排出されたウイルスの動態は両群で同様であった。感染動態の違いから、母性抗体がウイルス血症と抗体陽転開始を遅延させることが示唆された。定量的リアルタイムPCR解析の結果、糞便中のHEV RNAは約 10^6 copies/gであり、最初の排泄から10日後にHEV RNAのコピー数はピークに達することが明らかとなった。生後200日で、HEV RNAは13匹中3匹の内臓から検出された。ブタでのHEV自然感染について時間的経過を追った当該研究結果は、ブタからヒトへ感染する際のHEVの動態を理解するのに役立つであろう。	8
100206	2010/9/28	100527	パルボウイルス	Journal of General Virology 2010;91(2):541-544	パルボウイルスPARV4は、ヒト宿主のパルボウイルス科の種類として最近報告されたウイルスである。B型肝炎、C型肝炎あるいはHIV感染患者等の様々な集団由来の血漿、血清及び全血を用いて、定量PCR法により血中のPARV4の検出率が検討された。その結果、8検体がPARV4陽性であり、うち1検体は高コピー数を示した。高力価の血清は約 5×10^8 genome equivalents/mLであった。間接免疫蛍光法によって、PARV4抗体陽性が同定された2患者の血清を用いて、血清中の天然(native)PARV4を免疫電子顕微鏡下で可視化したところ、1患者由来の血清においてPARV4粒子が観察された。天然(native)のPARV4の可視化は、初めてのことである。	9

血対ID	受理日	番号	感染症(PT)	出典	概要	新出文献No.
100214	2010/9/29	100547	パルボウイルス	XXXIst International Congress of the ISBT;2010 Jun 26-July 1; Berlin,Germany	ヒトパルボウイルスB19(B19)DNA陽性血液製剤の感染性について検討された。2000年以降、ドイツのウルム研究所では、供血6～8週間後(血液製剤供給後)について、B19に対する供血者NATスクリーニングを実施している。レトロスペクティブな研究において、受血者を次の2群に分け(A群:B19ウイルス量 10^5 IU/mLの血液製剤受血者、B群:B19ウイルス量 $> 10^5$ IU/mLの血液製剤受血者)VP-1uゲノム領域の系統発生解析をB19DNA陽性供血者と受血者に対して行い、全ての試料に対して、IgM、IgG抗体を調べた。その結果、B19 DNAはB群の赤血球濃厚液受血者18名中9名に検出されたが、A群の受血者16名にはB19 DNAは検出されなかった。系統発生解析では、供血者と受血者間で同一ゲノム配列を示した。血液製剤によるB19伝播は、ウイルス濃度と中和抗体価に相関することが示唆されると説明している。	10
100214	2010/9/29	100547	ウイルス感染	Emerging Infectious Diseases 2010; 16 (5); 856-858 May 2010	2009年8月にテキサス州ダラスで採取した、ヒトスジシマカにおけるLa Crosseウイルス(LACV)について報告された。LACVは主にAedes triseriatusが媒介する、北アメリカでの小児脳炎の主要な原因域である。しかし近年、LACV脳炎が南東部地域で増加し、南部でも報告されている。同時にアジアからの外来種であるヒトスジシマカが増加しているが、今までヒトスジシマカとLACV伝播の関連は不明であった。今回の調査で、テキサス州ダラスで採取したヒトスジシマカからLACVが検出され、これまで流行が確認されていた範囲外で、外来性の蚊に当該ウイルスが認められた。	11
100214	2010/9/29	100547	ウエストナイルウイルス	CDC/MMWR 2010 July 2	2009年の米国におけるウエストナイルウイルス(WNV)の流行状況について、米国疾病管理予防センター(CDC)が発表した。米国の38州の262郡と、コロンビア特別区から720症例のWNV感染症が報告された。そのうち386例(54%)が神経侵襲性疾患で、334例(46%)が非神経侵襲性疾患であった。WNV感染症での死亡者は全部で33人が報告され、そのうち32人が神経侵襲性疾患であった。神経侵襲性疾患のうち229例(59%)が脳炎、117例(30%)が髄膜炎、40例(10%)が急性弛緩性麻痺であった。急性弛緩性麻痺40例のうち、27例(68%)が脳炎または髄膜炎を併発した。WNVによる疾病を制御する上で、調査の継続、蚊の管理、蚊に対する防御用具、及び更に予防戦略を検討することが必要である。	12
100214	2010/9/29	100547	レトロウイルス(XMRV)	ABC Newsletter #15.2010 Apr 23;15	ニュージーランドの血液バンクでは慢性疲労症候群(CFS)の既往を持つ供血者の供血延期を開始し、オーストラリア当局は、供血ガイドラインの見直しを行っている。ニュージーランドの決定は、前立腺癌と関連性があるXMRVが、健康集団と比較してCFS患者の血中に非常に多く認められたという調査を受けてなされた。他の科学者は、この結果を確認することができなかったが、米国保健当局は、CFSとXMRV間の関連の可能性について調査を行っており、カナダ血液サービスはすでにCFSの診断を受けた供血者からの供血を無期限延期としている。一方、オーストラリア赤十字血液サービスは、独自にリスク分析を行い、完全に回復するまでのCFS患者からの供血を延期することを現行のガイドラインで求めている。	13
100230	2010/10/26	100654	レトロウイルス(XMRV)	www.fda.gov/NewsEvents/Newsroom/PressAnnouncements/ucm223277.html	米国食品医薬品局生物製剤評価・研究センター及び米国国立衛生研究所臨床センターの研究者は、慢性疲労症候群(CFS)と診断された患者37例と健康血液ドナー44例由来の血液試料において、CFS患者由来の32例(87%)及び健康血液ドナー由来の3例(7%)に複数の異なるマウス白血病ウイルス(MLV)遺伝子配列を同定した。当該研究はMLV様ウイルスの遺伝的変異体であるXMRVがCFS患者の血液中に存在するとの過去の研究報告を支持し、CFSの診断と血液中のMLV様ウイルス遺伝子配列の存在との間に強い関連性があることを示している。さらにごく一部の健康血液ドナーにおいてMLV様ウイルス遺伝子配列が検出されている。CFSとの統計的な関連は強いものの、当該研究でレトロウイルスがCFSの原因であることが証明されたわけではない。	14

血対ID	受理日	番号	感染症(PT)	出典	概要	新出文献No.
100214	2010/9/29	100547	リフトバレー熱	ProMED-mail 20100513.1557	2010年5月10日の時点で南アフリカ保健省は、18人の死者を含む186人のリフトバレー熱(RVF)症例を報告している。主要な感染経路は、感染した家畜の血液や組織に触れることであるが、蚊に刺されることも感染原因となる。世界保健機関(WHO)は、南アフリカへの旅行に対して規制の勧告は行っていないが、特に農場や動物保護区に行く者は、動物組織や血液との接触を避け、未殺菌、非加熱ミルクや生肉の摂取をしないことを勧めている。全旅行者に対し、長袖長ズボンの着用や防虫剤、蚊帳を使用するなどして、蚊や吸血昆虫に刺されないよう注意を呼びかけている。また、ドイツ保健当局は、南アフリカ旅行から帰国したドイツ人の予備的診断ではRVFであったが、その後の追加検査により、この症例はRVFではなくリケッチア感染であったと報告した。	15
100236	2010/10/27	100663	Q熱	Clinical Infectious Diseases 50(11) 1433-1438 2010	2005年6月28日、イスラエル中央部の都市部で、全寮制高校の生徒及び職員の322名において多数の熱性疾患(発熱、頭痛、発汗など)症例が報告された。その後の調査で、その2週間前に大規模なQ熱アウトブレイクが発生していたことが分かった。Q熱疾患の危険因子特定するため、症例対照研究が実施された。2005年6月15日~7月13日の間に、303名中187名(62%)が体調不良の報告をしており、血清学的検査を実施した164名中144名(88%)に、 <i>C.burnetii</i> 感染が明らかとなった。Q熱感染の重大な危険因子は、学生であること、学校の食堂で定期的に食事をしたこと、6月の宗教上の休日期間並びにその前の週末に寮にいたことであった。PCR法により学食の空調から <i>C.burnetii</i> DNAが検出され、空調を介して病原体に空気感染したことが示唆された。	16
100236	2010/10/27	100663	アメリカ・トリパノソーマ症	J Infect Dis 201(9) 1308-1315 2010	<i>Trypanosoma cruzi</i> (<i>T.cruzi</i>)は媒介動物の糞便によって汚染された食物から経口感染する。アメリカ大陸での急性シャーガス病CDのアウトブレイク時において、ベネズエラでコホート疫学研究が実施された。曝露された1000名中103名に感染が確認され、そのうち75%に症状が認められ、20.3%が入院を必要とした。また59%は心電図異常を示し、44名(子供1名)に寄生虫血症が認められた。臨床的な特徴は媒介による感染で見られるものと異なっていた。子供は感染率が有意に高かった。疫学的な調査から、汚染した生グアバジュースが唯一の感染原因とされた。当該アウトブレイクは大都市部で主に若年齢を中心とした健康に問題のない集団における感染という、先例のない珍しいものであった。	17
100254	2010/10/28	100688	細菌感染	Agence France-Presse 2010/08/14	ベルギーにおいて、南アジア起源の薬剤耐性のsuperbugによる死亡1例が報告された。当該症例は、パキスタンを旅行中、交通事故にて脚を負傷し、パキスタンの病院で治療を受け、ベルギーに帰国後死亡した。新規に同定されたNew Delhi metallo-β-lactamase 1(NDM-1)遺伝子を有する細菌に感染していた。2症例目はモンテネグロを旅行中に事故に遭い、入院後感染したが、ベルギーで治療を受け回復した。	18
100202	2010/9/15	100453	細菌感染	The Lancet Infectious Diseases 10(9); 597-602; 2010 September	NDM-1(New Delhi metallo-β-lactamase 1)に起因するcarbapenem耐性腸内細菌(G(-))が問題となっており、インド、パキスタンおよび英国における多剤耐性腸内細菌におけるNDM-1の検出率を調査した。NDM-1が存在する分離株はChennaiで44、Haryanaで26、英国で37およびインドおよびパキスタンでは73株が分離された。NDM-1は大腸菌(36株)および肺炎桿菌(111株)で広く認められ、tigecyclineおよびcolistinを除くすべての抗生物質に強い耐性を示した。NDM-1陽性である英国人の多くは、一年以内にインドもしくはパキスタンに渡航歴があり、もしくは関連があった。	19
100202	2010/9/15	100453	細菌感染	毎日新聞 2010年8月17日	インド・パキスタンが発生源とみられ、ほとんどの抗生物質が効かない新種の細菌感染患者が欧州などで増えており、ベルギーでは2010年6月に最初とみられる死者が確認された。欧州メディアによると、英・仏・ベルギー・オランダ・独・米・カナダ・豪で感染が確認され、更なる拡大の恐れがある。Lancetの最新号に、特定の抗生物質を分解する酵素「NDM1」を作り出す遺伝子を持ち、ほとんどすべての抗生物質に対して耐性を持つ細菌について報告がある。	20

血対ID	受理日	番号	感染症(PT)	出典	概要	新出文献No.
100236	2010/10/27	100663	真菌感染	PLoS Pathogens 6(4); e1000850; 2010 April	Cryptococcus gattiiは、従来、熱帯・亜熱帯性真菌と考えられていたが、1999年にカナダ、バンクーバー島で大流行し、現在においても隣接するカナダ本土ブリティッシュコロンビアや米国本土においてヒトや動物に感染し続けている。この大流行はVGII型、特にVGIIa/majorが原因であったが、加えて、オレゴンで新しい遺伝子型(VGIIc型)が出現した。MLST及びVNTR解析によって、新型VGIIc及びVGIIa/majorは、マクロファージやマウスに感染し、強毒性を示すことが分かった。	21
100263	2010/11/29	100734	クロイツフェルト・ヤコブ病	ANN NEUROL 2010;68:162-172	新規の弧発性プリオン蛋白質疾患の特性解析について報告された。プロテアーゼ感受性プリオン(PSP _{Pr})の新規の2遺伝子型、メチオニン同型接合(129MM)とメチオニン/バリン異型接合(129MV)が報告された。2008年に報告された新規のプリオン病の被験者11人はプリオン蛋白質(PrP)遺伝子のコドン129が全員バリン同型接合(129VV)であった。129MM、129MV、129VVの被験者15人について、罹患期間(22~45ヵ月)は129VVと129MVの被験者で有意に異なった。PrP電気泳動プロファイルと共に他のほとんどの機能は同様であったが、主な違いは疾患関連PrPのプロテアーゼ消化の感受性であり、129VVは感受性が高いが、129MVと129MMでは低いか、あるいは全くない。この違いにより可変プロテアーゼ感受性プリオン症(VPSP _{Pr})と呼ばれるようになった。被験者のPrP遺伝子コドン領域に変異はなかった。3つの129遺伝子型が全て関係し、区別でき、表現型として関係するので、VPSP _{Pr} は2番目の弧発性プリオン蛋白質疾患になる。この特徴は1920年に報告したクロイツフェルトヤコブ病に似ていた。しかし、VPSP _{Pr} は異常プリオン蛋白質の特性において典型的なプリオン病と異なり、恐らくゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー疾患の亜型と類似している。	22
100206	2010/9/28	100527	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	European Medicines Agency 2010/07/24	2003年2月に公表され、2004年6月に改訂されたクロイツフェルト・ヤコブ病と、血漿由来医薬品及び尿由来医薬品についてのCPMPの見解(EMA/CPMP/BWP/2879/-02)の第2改訂版(案)であり、2010年9月30日まで意見を公募している。累積した疫学的エビデンスは、血液成分あるいは血漿由来製品による弧発性・家族性・医原性CJD感染を支持していない。ドナーの弧発性・家族性・医原性CJDが供血後に確認された場合、血漿由来製品の回収は妥当でないという以前からのCHMPの方針に変更はない。尿由来製品についてCJD、vCJDが感染したという疫学的なエビデンスはない。予防的措置として採血と同じドナーの選択基準を適用する。	23
100259	2010/11/25	100725	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Haemophilia 2010;16:305-315	英国の血液製剤による感染と遺伝性出血性疾患患者における英国の血液製剤による影響のリスクを低減する為の対策について報告された。vCJDの発生後、感染及び二次感染拡大のリスクを最小限に抑えるため、2004年に供血後にvCJDを発症したドナーから採取された血漿を含んでいるかどうかに関わらず、1980年から2001年までの間に英国でプールされた血液凝固因子製剤を投与された患者全員に予防措置が実施された。以降、英国におけるvCJDの新規症例は減少し、過去に関係する血液または血液製剤の投与を受けたvCJD患者は見つかっていない。しかし一般母集団における無症候性vCJD感染の有病率は不明であり、適切かつ有効なvCJDのスクリーニング試験はない。血友病患者において最近確認された1例目の無症候性のvCJD感染症例ならびにメチオニン/バリン異型接合患者におけるvCJD報告は、遺伝性出血性疾患患者を含む「リスクのある」集団において、継続調査が必要であることを示している。	24
100230	2010/10/26	100654	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Transfusion. 2010 May;50(5):1003-1006.	現在までに、後に変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)を発症した患者からの輸血によるvCJD感染例が4例報告されている。共通の供血者から輸血された可能性が示唆された症例は2例(症例A及びB)であった。症例Aは1989年に新生児特別治療室で4回の輸血歴があり、2006年、vCJDと診断されて6ヵ月後の18歳で死亡。症例Bは1993年6月と10月に2回の輸血歴があり、1998年にvCJDを発症し、41歳で死亡。合計103名の供血者の血液に曝露していた。症例Aと症例Bがいた両病院は同じ血液センターから供血血液の配給を受けていた。症例Bが曝露していた供血者103名中99名が症例Aへ輸血された後も、20年以上生存している。残りの4名はCJD以外の要因で死亡していた。vCJDを発症していない供血者から輸血を受けた症例AとBの2症例がvCJDを発症したことから、vCJD感染のパターンとして食事を通してBSEに感染した可能性も考えられる。	25